KG244-H16
1200404191947

良寛禪師
自選歌集

ふるさと

吉野秀雄釋文

良寛禪師
自選歌集

ふるさと

吉野秀雄釋文

KG244
H16

解　説

良寛禪師の自筆歌稿「ふるさと」は壘附十三葉の冊子にして、原本は安田靱彦氏の珍襲にかかり、複製は大正十一年七月七條憲三氏の金屬版印刷所より非賣品として刊行され、越後出雲崎なる禪師が生家橘屋の屋敷址に佐藤吉太郎氏等相謀りてかの良寛堂を建立せる際の記念品として配布せられたり。余夙にこれを座右にして、細描鐵線の勁きが裡に藏する滋味無量の書美と醇粹暢達の歌調との渾然たるを愛賞措かざるや年久しく、而して今ここにその釋文を作りて江湖に頒たんとするの所以は、件の複本と雖も既に希覯なること、禪師の萬葉假名草體を盡く讀みとるは必ずしも容易ならざること、是素禪師がかりそめの手控へにはあらめど尙めづらかなる自選歌集の一種として觀るも敢て差障なかるべきこと、從つて世の編纂物の類とは自ら趣きを異にして禪師直接の微妙なる息吹きの內籠れること、一集甚だ秀逸に富めること、問々推敲の痕をも探り得ること等に因るものとす。卽ち、禪師の歌は禪師の書と相俟ちて神氣ひと際爽々たるは今更言ふを須ゐざれども、釋文の文學的價値のみを以てしても、これを一般化するの意義決して尠少ならざることを信ずればなり。

本集收むるところ長歌三首、反歌一首、旋頭歌六首、準旋頭歌一首、短歌五十首、外に禪師が次弟由之の短歌一首を交へたり。而して、集中の長歌に國上山五合庵に移り住まひて春秋十とせを過ししよしあるは禪師六十歲に近き頃の述懷と覺しく、旋頭歌に山蔭の眞木の板屋とあるを國上山麓乙子祠畔の草庵と見ればこは五十九歲以後の詠出なるべく、依てこの稿本の成りし時期も略ゝ察するに難からざらんか。

昭和丙戌晩春　　吉野秀雄

凡例

一、ここに余が筆寫草稿のままに印刷せしは、組版複雜にして誤植を生ぜんことを憂へたればなり。他意あるにあらず。

一、本文は、素よりひたすら稿本あるがままの姿の再現をこそ期したれ。但し便宜上、をどり字を廢め、濁點を施せり。

一、明白なる誤字、脫字、誊字は、本文中に【　】を挿みて處理せり。輕々しく誤字、脫字を斷じ難き場合は一々註せり。

一、假名遣ひの異れるものは、右側に（　）を以てその正しき文字を示せり。

一、左側に漢字を宛てまた若干の註釋を加へたるは、本文をして何びとの眼にも親しからしめんがためのみ。識者、しばらくその煩しさを默許されよ。

一、稿本に抹消されたる部分或は文字につきては、一たびこれを寫して後左側に――を引き置けり。左側に――を帶びて右側に文字あるは、改められたる何なり。左側に――を帶びずして右側に文字あるは、二案擇一の決せられざる形なり。

あふみぢをすぎて（近江路過）

ふるさとへゆくひとあらばことづてむけふあ（故郷三島野宮市時ヨリ行）（人有）（言傳）（今日八近）

ふみぢをわれこゑにきと（江路）（我越）（こえ）

あこうてふところにて天神の森にやどり（赤穂播磨ヨリ）（所）（宿）

ぬさよふけがたあらしのいとさむふき（夜更方）（嵐）（寒）（う）（吹）

たりければ（おろ）

一　やまあらしよいたくなふきそちはやふるころ（山）（風）（痛）（吹）（ちろたへの）（其二枕詞）（衣）

もかたしきたびねせしよは
片敷 旅寢 夜

つぎのひはからつてふところにいたりぬ
次日 唐津肥前ナリ 所 至

こよひもやどのなければ
今宵 宿 無

おもひきやみちのしばくさうちしきてこよひ
思 道 芝 草 打 敷 今 宵

もおなじかりねせむとは
同 假寢

たかののみてらにやどりて
高野 紀伊ナリ 寺 宿

つ〔き カ〕のくにのたかののおくのふるてらに
津 紀 國 高 野 奥 古 寺

すぎのしづくをききあかしつつ
杉 雫 聽 明

くろさかやまのふもとにやどりて
黒 坂 山 越後西蒲原郡ナリ 麓 宿

あしひきのくろさかやまのこのまよりもりく
枕 詞 黒 坂 山 木 間 洩

るつきのかげのさやけさ
月 光 清

いはむろをすぎて
岩 室 越後西蒲原郡ナリ 過

いはむろのたなかのまつをけふみればしぐれ
岩 室 田 中 松 今日見 時 雨

〔の 脫〕あめにぬれつつたてり
雨 濡 立

くがみにてよめる 詠

きてみれば わがふるさとは あれにけりにはも 荒 庭
来 見 飛 故 里

まがき(も脱)おちばのみして
籬 落葉 業

いにしへをおもへばゆめ あかうつつかもよるは
往 昔 思 夢 現 夜

しぐれのあめをききつつ
時 雨 雨 聞

あしひきのやまべにすめば すをなみしきみ
(枕 詞) 山 邊 住 巣 無 榊

つみつつこのひくらしつ
摘 此 日 暮

くがみのおけとののまへ のひとつまつ いくよ
国 国上山麓国上寺ナリ 大殿 前 松 幾 世

へぬらむ はやふるかみさびたてり あしたに
経 (枕 詞) 神 立 朝

はいゆきもとふ(ほ)りゆふべには そこにいでたち
行 徘 徊 夕 其 處 出 立

たちてみれども あかぬひとつまつはや
立 居 見 飽 一 松

やまかげのありそのなみの たちかへり みれど
山 蔭 荒 磯 波 (二ノ句マデ序) 返 見

もあかぬひとつまつのきし
飽 一 松 木

あしひきのくがみのやまに いへねして いゆき
(枕 詞) 国 上 山 山 家 居 行

(此上山ハ今ノ上ノ山ニアラズ)

かへらひやまみれば　山見
やまもみがほしさとみれ　欲里見
ばさともゆたけしはるべには　里豊　春選
はなさきををり　花咲　撓
あきされば　秋
もみぢを　紅葉
たをりひさかたの　折　枕　詞　月
つきに　月
かざして　髢
あらたまの　枕　新　年
としのとせは　十　年　過
すぎにけ
らしも

しづがやの　賤　家
かきねには　垣　根　春
はるの　春
たちしより　立
わかな　若　菜
つまむとしめぬ　摘　標　日
ひは　日
なし　無

わかなつむ　若　菜　摘
しづがかど　賤　門
たのたのあぜに　田　田　畦ノ訛音カ
ちきり　一本ちどり　トヨリ　ちきり　ハ鶺鴒ノ方言カトモイヘリ
なくなり　鳴
はるには　春　成
なりぬ

このそのの　此　園
やなぎの　柳
もとに　下
まろねして　圓　寝
あそぶ　遊

はるひは　春　日
たのしきを　楽
つめ　萬葉集ニ従ヘバをつめト書ケル例アリつヲ書損ジト見ル終ナシ難シをづめトモ解セラルカ集樂

うめの　梅
はなを　花
をりて　折
かざして　髢
いそのかみ　枕　詞　古
ふりに　古

しことを　事
しぬびつる　偲
かも　す脱シテ後ニ補ヒヨリ
かすみたつ　霞　立
ながきはる　永　春
ひに　日
こどもらと　子　供　等
てまり　手　毬

つきつつこのひくらしつ（此日暮）

このさとにてまりつきつつこどもらとあそぶ（此里 手毬 突 子供等 遊）

はるひはくれずともよし（春日暮 所）

このみやのもりのこしたにこどもらとあそぶ（此宮 森 木下 子供等 遊）

はるひになりにけらしも（春日 成）

（頭二日ノ印アリ）

ひさかたのあまぎるゆきとみるまでにふるは（枕詞 天霧 雪 見 降）

さくらのはなにありける（櫻 花 有 ・一本ニノ下ニぞアリ）

あをやまのこぬれたちくきほととぎすなくこゑ（青山 木梢 立 潜 時 鳥鳴 聲）

聽きけばはるはすぎけり（聽 春 過）

ほととぎすながなくこゑをなつかしみこのひ（時 鳥汝 鳴 聲 懷（を脱シテ後ニ補ヒアリ） 此日）

くらしつそのやまのべに（暮 其 山 邊）

よのなかをうしともへばかほととぎすこのま（世 中 憂 思 時 鳥木間（のまニ字句ヲ改メテ後ニ挿入セリ））

がくれてのみなきわたるなり（隱 鳴 渡）

まくらばにひともかよはぬやまざ〔と脱〕はこ（枕詞 人 通 山 里）

わくらばヨ訛レルナラン

ずへ(忍)にせみのこゑばかりして　末 蟬 聲

つきよよみかどたのたゐにてみれば(日)とをや　月 夜好 門 田 居 出 見 遠 山

まもとにきりたちわたる　下 霧 立 渡

わがまちしあきはきぬらし(はき二字脱シテ後ニ補ヒアリ)このゆふべくさむ　我 待 秋 来 此 夕 草 叢

らごとにむしのこゑする　毎 虫 聲

ひさかたの(枕)た(な脱)(詞)織ばたつめはいまもかもあ　安 今 天

まのかはらにいでたたすらし　久 川 原 出 立

わたしもりはやふなでせよぬばたまのよきき　渡 守 早 舟 出 為 (枕) (詞)夜 霧

(りカ)はたちぬかはのせごとに　立 川 瀬 毎

ひさかたのあまのかはらのわたしもりかはな　(枕) (詞)天 久 川 原 渡 守 川 波

みたかしこころうてこせ　高 心 越

ぬばたまのよはふけぬらしむしのねもわがこ　(枕) (詞)夜 更 蟲 音 我

ろもでもうたてつゆけき　衣 手 鞆 露 (け脱シテ後ニ補ヒアリ)

十一

いまよりはつぎてよさむになりぬらしつづれ　今 次 夜 寒 成 蘆 縫

させてふむしのこゑする
刺　虫　聲

いそのかみふるかはのへのはぎのはなこよ
（枕詞）　古　川　邊　萩　花　今　宵

ひのあめにちりすぎぬらむ
雨　散　過　移

うつろひ

さびしさにくさのいほりをでてみればいなばの
淋　草　庵　出　見　稲　葉

おしなみあきかぜぞふく
押　靡　秋　風　吹

わがやどをたづねてきませあしひきのやまの
我　宿　訪　來　（枕詞）　山

もみぢをたをりがてらに
紅　葉　手　折　兼

あきやまをわがこえくれればたまぼこのみちも
秋　山　我　越　來　（枕詞）　道

てるまでもみぢしにけり
映　紅　葉　為

このごろのねざめにきけばたかさごのおのへ
此　頃　寢　覺　聽　（枕詞）　高　砂　上

にひびくさをしかのこゑ
響　牡　鹿　聲

やまざとはうらさびしく（ぞ脫）なりにけるき
山　里　浦　淋　成　木

ぎのこずへのちりゆくみれば
木　末　散　行　見

もみぢばはちりはすぐるともたにがはにかげだ
紅　葉　葉　散　為　渡　川　影

にのこせあきのかた〔みゆ脱〕に
（紅葉 形 見）

よをさむみかどたのくろに（る）いるかも〔の脱〕い
（世 寒 門田 畦 居 鶴 寝）

ねかてにするころにぞあき〔二字衍字〕ありける
（寝 不 頃 秋 有）

わがやどはこしのしらやまふゆごもりゆききえ
（我 宿 越 白 山 冬 籠 往 来）

のひとのあとかたもなし
（人 跡 方 無）

はるのよ由之をゆめにみてさめて
（春 夜 拾遺抄ニ貫之ナリ 夢 見 覚）

いづくよりよるのゆめぢをたどりこしみやま
（何 處 夜 夢 路 辿 来 山）

はいまだゆきのふかきに
（来 雪 深）

きさらぎのきふかばかりにいひこふとて
（如 月 十 日 詠 飯 乞）

まきやまてふさこころにゆきて有則がもと
（真木 柱 山 知家卿ニ問ヒ参ル事ヨリ 所 行 て 信ニ袖ヒツリ 有則 家 元 原田 鶴 元 問ヒ ヨリ 元）

のいゑをたづねればいまはのらとなりぬ
（家 訪 今 野良 成）

ひときのうめのちりかかりたるをみてい
（一 木 梅 散 掛 見 往）

にしへおもひいでてよめる
（昔 想 出 詠）

十五　そこ〔のカ〕かみはさけにうけつるうめのの〔樊
（其 昔 酒 浮 梅）

字）はなつちにおちけりいたづらにして
花 土 落 徒

ふるさとにはなをみて
故里 花 見

なにごともうつりのみゆくよのなかにはなは
何事 移 行世 中 花

むかしのはるにかはらず
昔 春 変

あひしりしひとのみまかりてまたのはる
相識 人 歿 又 春

ものへゆくみちにてすぎてみればすむひと
物 行 途 過 見 住 人

とはなくてはなはにちりみだりてあり
無 花 庭 散 乱 有

りけれ

おもひへすまたこのいほにきにけらしありし
思 又 此 庵 来 在

むかしのこころならはひに
昔 心 慣

左一がみまかりしころ
三條殿手ノ家御所ノ法華堂ノ 歿 頃

このさとにゆききのひとはさはにあれどもさ
此 里 往 来 人 多 有 (枕)

すたけのきみしまさねばさびしかりけり
詞) 君 在 淋

またのはるわかなつむとて
以下四行後二重出セル故左側ノ宛字略ス

あず(づ)さゆみはるのにいでてわかなつめどもさ
すたけ〔の脱〕きみしまさねばさびしかりけり

いほにきてかへるひとをみおくるとて

またのはるわかな 春 若菜 摘 つむとて

あづさゆみはるのにいでてわかなつめどもき
(枕) 詞 春 野 出 たのしくもなし 装 菜 摘 (枕)

すたけのきみしまさねばさびしかりけり
詞 君 在 湖 葉 無

いほにきてかへるひとをみおくるとて
庵 来 歸 人 見 送

やまかげのまきのいたやにあめもふりこねさ
山 蔭 真 木 板 屋 雨 降 来 (枕)

すたけのきみがしばしとたちどまるべく
詞 君 暫 立 留 可

ふるさとのひとのやまぶきのはなみにこ
故 里 人 山 吹 花 見 来

むといひおこせたりけりさかりにはまて
言 寄 盛 待

どもこずちりがたになりて
来 散 方 成

やまぶきのはなのさかりはすぎにけりふるさ
山 吹 花 盛 過 故 里

とびと〔を脱〕まつとせしまに
人 待 為 間

さつきのころ由之がかたより いひおこせ
五月 頃 禪師の宮美濃の方 寄

たるうた
歌

わがやどののきのしやうぶをやえふかばうき
我 宿 軒 菖蒲 八重葺 憂

よのさがをけだしよきむかも
世 慣 蓋 避

かへし
返

やへふかばまたもひまをやとめもせむ みすす
八重葺 又 隙 竟 身 濯

ぎがはへもちてすてませ
川 持 捨

おさなきときいとむつかしくちぎりたる
幼 時 最 入 念 契

ひとありけりいなかをすみわびてあづま
人 有 田 舎 住 侘

のかたへいにしがけりこなたよりも
方 脱カ 去 此 方

かなたよりもひさしくをともせでありし
彼 方 久 音

がこのたびみまかりぬとききて
此 度 歿 聞

かくあらむとかねてしりせばたまぼこの
此 有 兼 知 枕 詞

みちゆきびとにことづてましを
道 行 人 言 傳

このくれのうらがなしきにくさまくらたびの
此 暮 べ 悲 （枕詞） 旅

いほりにはてしきみはやよみて由之につかはす
庵 果 君 詠 （神鹿ノ次第ナリ 遠）

くさのいほにたちてもぬてもすべのなきこの
草 庵 立 寝 術 無 此

ごろきみがみるぬおもへば
頃 君 見 （え） 思

かみなづきのころたびびとのみのひとつ
神無月 頃 旅 人 蓑 一

きたるがかどにたちてものこひければふ
着 門 立 物 乞 古

るぎぬぎてとらしめすさてそのよあらし
着脱 取 授 其 夜 嵐

のいとさむくふきたりければ
野 寒 吹

たがさとにたびねしつらむぬばたまのよは（の
誰 里 旅 寝 （枕詞） 夜 半

脱）あらしのうたてさむきに
嵐 特 寒

としのはてにかがみをみて
年 果 鏡 見

しらゆきをよそにのみみてすぐせしがまさに
白 雪 外 見 過 正

わがみにつもりぬるかも
我 身 積

しらゆきはふれば(降)かつけぬ(消)しかはあれど(有)がし(頭)
らにふれば(降)きえず(消)ぞあり(有)ける

とし(年)のはてによみてありけるのりに(歌)おくる(贈)

のつみのみてらのそのの(園)(寺)のうめ(梅)のきをね(根)こじに(根掘)
せむとあづさゆみはる(春)のいゆふべ(夕)にいはがね(根)(磐)

のこごしきみち(道)をふみわけてのきば(軒端)にたてば(立)
ひとはみてぬ(見)(盞)〔す(脱)〕びと(人)となりとかね(鐘)をうち(打)つ

づみ(鼓)をならしあしひきの(枕詞)やま(山)とよもしてつど(集)
ひけりしかしよりしてみなびと(皆人)にはなぬすび(花盗人)
とよ(呼)ばはえしきみ(君)にはあれど(有)いつしかもと(行時)
しもへぬればあしの(葦)やの(屋)まろや(丸屋)がもと(下)によも(夜)
すがらやつか(八束)のひげ(髭)をひねり(捻)つつおはすらむ(在)
かもこの(此)つきごろ(月頃)は

いはむろ(岩室)
越後西蒲原郡ナリ

いはむろのの(岩室野)なかにたてるひとつまつのきけ(立一松木今)

ふみみればしぐれのあめにぬれつつたてり(日見時雨西 濡立)

やまたづ(枕詞ヲ題トセリ)

やまたづのむかひのをかにさをしかたてりか(枕詞)(向岡 牡鹿立神)

みなづ(き脱)しぐれのあめにぬれつつたてり(水月時雨雨 濡立)

あきのの(秋野)

あきのの(の脱)ちぐさおしなみゆくはたがこ(秋野千草 靡行誰子)

ぞしらつゆにあかものすそのぬれまくもおし(を)(白露赤裳 濡惜)

しらゆきし(白雪)

しらゆきはふればいくへもつもれつもらねば(白雪降幾重積 敷)

とてたまぼこのみちふみわけてきみがこなく((枕詞)道踏分 君来)

に

はちのこ(鉢子)(枕鉢用ノ鐵鉢ナリ)

はちのこをわがわするれどもとるひとはなし(鉢子我忘盗人無)

-1 JUN 1948

昭和二十三年一月十日印刷
昭和二十三年一月廿日三版發行　拾五圓

原著者　良寛
釋文者　吉野秀雄
發行者　佐藤八平
東京都中央區銀座西八ノ四
印刷者　益子恒義
東京都文京區音羽町三ノ一九
印刷所　豊國印刷株式會社
東京都文京區音羽町三ノ一九
發行所　十一組出版部
東京都中央區銀座西八ノ四

盜人奪錄　とるひとはなしはちのこあはれ

KG344.H16